

平成30年
5月31日

病害虫発生予報 6月号

茨城県病害虫防除所
茨城県植物防疫協会

平成30年度茨城県農薬危害防止運動が始まります(6/15~9/14)
～薬剤散布時には周囲への飛散防止に努めましょう～

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水稻：縹葉枯病（ヒメトビウンカ）	1
水稻：ニカメイガ	2
ナシ：黒星病	2
ナシ：ナシヒメシンクイ（第二世代幼虫）	3

【防除所レポート】ナシヒメシンクイの防除適期の予測

果樹共通：チャバネアオカメムシ	4
-----------------	---

【防除所レポート】サクラにおけるチャバネアオカメムシの発生状況

夏ネギ：黒斑病，ネギハモグリバエ	5
------------------	---

夏ネギ：ネギアザミウマ	6
-------------	---

【防除所レポート】小麦の赤かび病の発生状況と今後の対策について

【その他の病害虫】

水稻，ブドウ，半促成ピーマン，夏ネギ	8
--------------------	---

II. 今月の気象予報

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/>
フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
早い	多い	県西地域, 県南の一部地域

[予報の根拠]

- ① 有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛期は、平年より早いと予測される。
- ② 5月中旬に小麦圃場より採集したヒメトビウンカ第一世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率は、県西地域の8地点中7地点で、県南地域の3地点中3地点で5%以上の高い値である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 昨年、本病の発生が認められた地域で、ヒメトビウンカを対象とした育苗箱施用してもなお本病の発生が多かった水田や、本年育苗箱施用をしなかった水田等では、6月第3半旬～第4半旬（6月11日～20日）頃にヒメトビウンカを対象とした本田防除を行う。なお、気象予報によると向こう1か月の気温は平年より高く推移すると予想されるため、防除適期が予測より数日早まる可能性がある。
- ② 育苗箱施用と本田散布の体系防除を行う場合等は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を選択する。

（平成30年5月25日発表 病害虫発生予察注意報第1号参照）

水稲いもち病の防除について

[現在の状況]

5月下旬現在、置苗での本病の発生は認められない。

[発生好適条件]

気温20～25℃で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間濡れるような条件のとき。一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[防除上注意すべき事項]

- ① 置苗は本病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等適切に処分する。
- ② 常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。
- ③ 本病は例年6月下旬から発生する。粒剤による本田防除の適期は初発前～初発時なので、適期を逃さずに防除する。
- ④ 粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。

※防除所HPにて6月よりBLASTAM（アメダスデータを利用した葉いもちの発生予測プログラム）による葉いもちの感染好適日の出現状況を随時掲載する予定ですのでご参照ください。

(水稲 続き)

2. ニカメイガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
早い	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① フェロモントラップへの誘殺時期は、県予察圃（水戸市）、龍ヶ崎市および筑西市で平年より早い。
- ② 5月第4半旬までのフェロモントラップへの総誘殺数は、県予察圃（水戸市）および龍ヶ崎市で平年より多く、筑西市で平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 例年発生が目立つ水田では、6月上旬に第一世代幼虫を対象とした薬剤防除を実施する。

ナ シ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや少ない	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、葉における発病率（本年値 0.1%、平年値 0.3%）は平年よりやや少なく、果実における発病率（本年値 0.02%、平年値 0.34%）は平年より少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 効果的に防除するためには、二次伝染源の除去が重要であり、発病した葉および果実は見つけ次第除去し、園外に持ち出して土中深く埋める等適切に処分する。
- ② 薬剤散布は、発病部位を除去した後に行うと防除効果が高い。
- ③ 薬剤は、10a 当たり 300 リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(ナシ 続き)

2. ナシヒメシンクイ (第二世代幼虫)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並～ やや早い	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在、第一世代成虫の発生時期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から、平年並～やや早いと予測される。
- ② 5月下旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、地区予察圃（かすみがうら市、石岡市）および土浦市で平年並、地区予察圃（笠間市、小美玉市）で平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、第二世代幼虫が発生するため、平成30年版露地赤ナシ無袋栽培病害虫参考防除例を参考に適期防除に努める。防除適期については、下記の防除所レポートを参照する。
- ② 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

防除所レポート [ナシヒメシンクイの防除適期の予測]

- ① ナシヒメシンクイ第二世代幼虫を対象とした防除適期は、**第一世代成虫の誘殺数がピークに達した日の7～9日後**である。
- ② 各地点の第一世代成虫の誘殺最盛期は、越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺最盛期と有効積算温度から予測し、おおむね平年並～やや早い。
- ③ 表中のかすみがうら市、土浦市、筑西市（旧下館市）については、今後、病害虫防除所ホームページで情報を随時更新するので参考にする。

表 調査圃場におけるナシヒメシンクイ第二世代幼虫の予測防除適期

地点	第二世代幼虫の予測防除適期 ¹⁾		
笠間市（旧友部町）	6月20日	～	6月23日
笠間市（旧岩間町）	6月17日	～	6月20日
小美玉市	6月16日	～	6月19日
石岡市	6月16日	～	6月21日
かすみがうら市	6月16日	～	6月21日
土浦市	6月19日	～	6月25日
筑西市(旧下館市)	6月17日	～	6月21日

果樹共通

1. チャバネアオカメムシ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 本年2月上旬の越冬量調査における成虫の越冬数（本年値 2.6 頭，平年値 2.3 頭）は平年並～やや多く，越冬地点率（本年値 38%，平年値 42%）は平年並である。
- ② 5月下旬現在，調査圃場のナシ果実において，被害果を認めず平年並である。
- ③ 5月第4半旬までの予察灯への総誘殺数は，県予察圃（水戸市）で平年より多く，県予察圃（笠間市）およびかすみがうら市で平年よりやや多い。
- ④ 5月下旬現在，サクラ果実における吸汁果率は平年より高い（本年値 100%，平年値 44.2%）。
（下記の防除所レポート参照）

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温の上昇に伴い活動が盛んになり，果樹園への飛来が増加するので注意する。果樹園内でカメムシ類を確認した場合には，活動が鈍い早朝に薬剤防除を行う。
- ② 多目的防災網（6mm 目または 9mm クロス目等）はカメムシ類の園内への侵入を防ぐため，被害軽減に有効である。

防除所レポート [サクラにおけるチャバネアオカメムシの発生状況]

- ① サクラ樹上での5月における生息数は，平年より少ない（図）。要因として，果樹園に設置した予察灯への初誘殺は平年より早く，サクラ果実の生育も平年より早かったことから，調査期間前にサクラへの飛来最盛期を迎え，すでに離脱していたと考えられる。
- ② 吸汁されたサクラ果実の割合は，5月各旬とも90%以上と平年より高くなった。すでに，餌を求めて果樹園や他の植物に移動している可能性が高いので注意する。

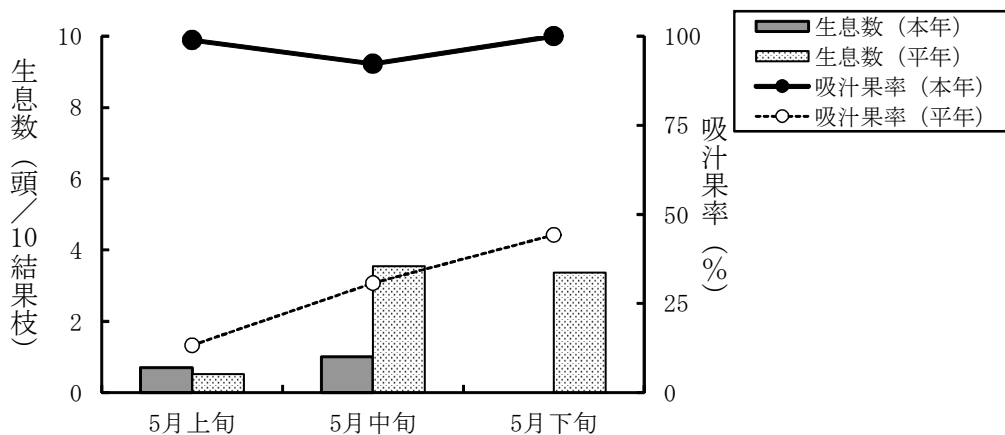


図 サクラにおけるチャバネアオカメムシの生息数と吸汁果率

夏ネギ

1. 黒斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，発病度^{*}（本年値 1.6，平年値 0.2），発生地点率（本年値 56%，平年値 10%）ともに平年より高い。

※発病度：病斑をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期の防除に重点をおき，その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布の際は必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また，収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤耐性菌の出現を防ぐため，FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 肥料切れや多肥は発生を助長するため，生育状況に合わせ適切な肥培管理を行う。

2. ネギハモグリバエ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在，被害度^{*}（本年値 10.0，平年値 3.6），発生地点率（本年値 89%，平年値 61%）ともに平年より高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後は気温の上昇に伴って増殖が速くなるので，発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 薬剤散布の際は必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また，収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため，IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(夏ネギ 続き)

3. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 5月下旬現在, 被害度※(本年値 23.6, 平年値 26.0)は平年並, 芯葉の被害株率(本年値 76.0%, 平年値 54.9%)は平年よりやや高い。

※被害度: 食害の程度をもとに算出した数値, 最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後は気温の上昇に伴って増殖が速くなるので, 発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 雑草にも寄生するため, 圃場周辺の除草を徹底する。
- ③ 薬剤散布の際は必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また, 収穫前日数に十分注意する。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため, IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。



施設野菜の栽培終了後の管理について

促成トマトおよび促成キュウリにおいて, 微小害虫が媒介するウイルス病(トマト:黄化病, キュウリ:黄化えそ病, 退緑黄化病)の発生を一部圃場で認めました。

栽培終了後の野菜施設では, 次作の病虫害防除のための管理を適切に行いましょう。

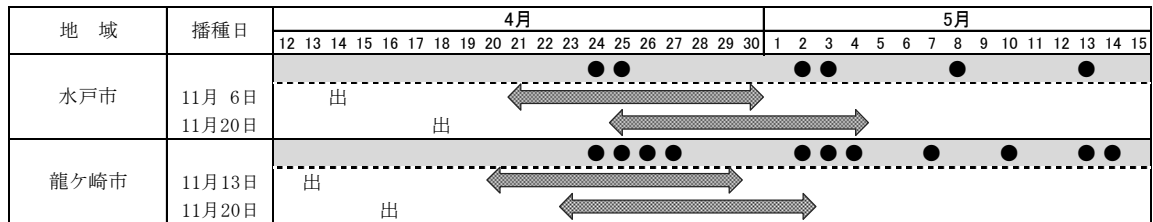
アザミウマ類, コナジラミ類, アブラムシ類等の微小害虫は, 各種ウイルス病を媒介するので, ハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため, 株を抜き取り誘引したまま2週間程度ハウスを密閉する蒸し込みを行います。蒸し込み終了後は, 作物残渣をハウス外へ持ち出して適切に処分してください。

防除所レポート【小麦の赤かび病の発生状況と今後の対策について】

[現在の状況]

- ① 5月下旬現在, 小麦の赤かび病の発病穂率(本年値 1.5%, 平年値 0.4%), 発生地点率(本年値 64%, 平年値 25%)ともに平年より高い。
- ② 小麦が赤かび病に感染しやすい時期は開花始期(出穂期 7 日後頃)から 10 日間程度である。今年は, 「4月 24 日から 27 日まで」および「5月 2 日から 4 日まで」に本病の感染好適条件が出現した(図)。

図 小麦の出穂期と赤かび病菌の子のう胞子飛散好適条件の出現状況(農業研究所)



● : 子のう胞子の飛散好適日

(日最低気温 10℃以上, 日最高気温 15℃以上で, 湿度 80%以上か降雨日とその翌日。ただし, アメダス龍ヶ崎は湿度データがないため, 気温と降雨条件のみ参照した。)

出 : 出穂期(圃場の 40~50%程度の茎が出穂した日)

⇔ : 感染しやすい時期(開花始期(出穂期 7 日後頃)から 10 日程度)

※地域や圃場により出穂期や飛散好適条件の出現状況は異なるので, 参照の際は注意する。

[収穫期以降の対策]

- ① 収穫が遅れると, 被害粒から健全粒へと感染が広がる恐れがあるため, 適期収穫に努める。また, 圃場内で倒伏した部分は多湿条件となり, 感染が広がっている恐れがあるため, その部分は刈り分けて処分する。
- ② 含水率の高い麦を収穫した場合, 袋の中で本菌がまん延することがあるので, 収穫後は時間をおかずに適切な乾燥・調製を行う。
- ③ 小麦では, グレーダーによる粒厚選別(2.4mm 以上)等は被害粒の除去に有効である。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネドロオイムシ	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。曇雨天が続くと発生が助長されるので注意する。幼虫の発生が多く，食害が目立つ場合は防除を行う。
	イネミズゾウムシ		5月下旬現在，平年並の発生である。
ブドウ	灰色かび病	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。
	べと病		
半促成ピーマン	斑点病	発生量：やや多い	5月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	うどんこ病	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。
	タバコガ	発生量：多い	5月下旬現在，平年より多い発生である。
	ハダニ類		
アザミウマ類	発生量：平年並 ～やや多い	5月下旬現在，平年並の発生である。向こう1か月の気温は平年より高いと予想され，発生を助長する条件である。	
夏ネギ	さび病	発生量：平年並 ～やや多い	5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
	べと病	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 6月2日から7月1日)

気象庁(5月31日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	10	30	60
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<1週目の予報> 6月2日(土曜日)から6月8日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率80%

<2週目の予報> 6月9日(土曜日)から6月15日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 6月16日(土曜日)から6月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成30年4月26日発表)の防除所レポート参照

- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。